

## 千里山時代のあそび (三)

二十回生 久保利也

右ページの絵は「千里山時代のあそび」に興味をもつてくださった同期友人に依頼して描いて貰ったものです。紙面の都合上縮小していますが、今まで書いて来たこと、そして未だ書ききれていないわたし達のあそびが正確に、緻密に網羅されています。すべての季節が回り灯籠の展開図のようですが、みんな元気いっぱい、楽しそうに遊んでいます。

実はこれを描いて呉れた仁にプロフィールの公表を依頼したのですが「自分達の子供時分を振り返るよき機会を与えられた、ただその答礼と理解して欲しい」との弁で、おなまえの公表を辞退されました。

毎号の会員情報にあらゆる分野で活躍しておられる同胞の近況を識るたびに、感動や敬服を覚えるのみならず無芸蒙昧なる哀れな己の生きざまに、後悔や自戒そして諦観の悔恨頻りです。

### じゃんけん

さいしよはぐー じゃんけんぽん!

テレビの影響で全国的にこのような掛け声に統一されたようですが、我々昔の千里山ではいきなり「じゃんけんほい」と始まりました。

仲間が集まって順番を決めたり、鬼や親を選ぶときあるいは二組に分かれたりする必要が生じたときにはまずこれです。道具も準備も何も要らず即時に勝敗、順番、黒白を決めることが出来るあそびというより、誰でも知っている明白なルールというものでしょうがじゃんけんそのものがあそびという独立形もいろいろあります。

まずじゃんけんの由来と歴史を述べますと、中国から渡来した「拳(けん)」がもとで、いろんな表示方法つまり指であったり、石であったり、銅銭や箸で二人以上の拳指で興じる上にその取り決めは豊富にあります。その代表的なものとして三すくみの拳が指形

によってカエル・ヘビ・ナメクジであったものが女性方に不快、嫌悪感を与えるということ、拳を開いて紙、拳を閉じて石、二指を出してはさみということになったのは天保時代、一八三〇年頃だそうです。その二指のはさみも親指と人差指であったのですが、明治中頃に人差指と中指つまりこんにちのチョコキになったということです。しかし現在でも親指、人差指のチョコキで行われている国はたくさんあります。

じゃんけんは掛け声とともに開始します。最初に書いたものはスタンダードつまり我国共通のものと解釈されていますが、地方では昔から語り伝えられて来た掛け声が当然のように残っております。昔の千里山では「じゃいけんほい」とか「じゃいけんでしょ」「あいこでしょ」と言っていました。

仲間に少し行儀の悪いのがいましてこのグループでは「じゃらけつおけつであいすくりんでほい」と叫ぶのです。この稿を興すに当たって資料をみていましたら、これは三重県あるいは三重県寄りの奈良県地方の掛声だそうです、どうしてこれが千里山の我々の間で使用されていたのか、これは後に述べる「めんこ」と

### クギさし

上も下も男兄弟のAさんは髪振りみだしてわたしたちの仲間としてクギを投げつけていましたから、この遊びはあまり年齢に関係なくだれでも楽しく遊ぶことが出来ました。しかし、少し危険性のあるものでした。

危険性の一は、当時はズックなんて履いている子は少なくて殆んどがゲタかぞうり、つまり足はハダカの状態で地面にクギを投げ差す遊びですから周辺で見ている人はあぶないなあと叫んでいました。がわたしのまわりでケガをした子はいませんでした。

もう少しあぶなかったのはフミキリです。

二三年前のお茶の水の総会場でA君が「あれ、書かんかい、フミキリの・・」と助言して呉れましたのは、クギさしのためのクギを電車のレールの上に乗せるといふ少しあぶないおこないです。

四月に千里山へ行って参りましたが現在の踏切りは駅のすぐ隣り、つまり地下道と同じ所が変わっていましたが、昔の踏切りはもう少し大学前寄り、即ち駅から

同じく三重県あたり出身の先人が千里山にてこれを残したと考えられます。

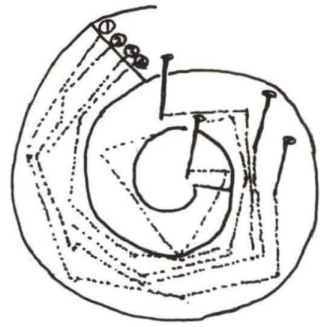
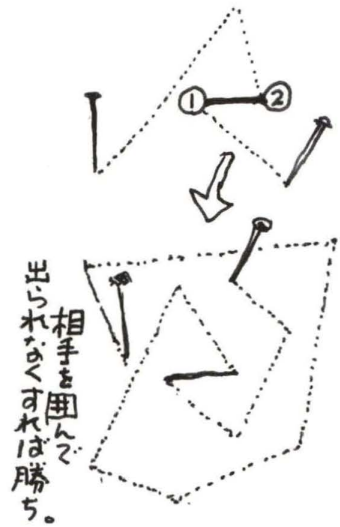
愚息の幼時、学齢期は神奈川でしたが、これは今も資料に残る通り「ちつけったつ」との掛声、茨城、千葉も同じで、やはり少しくだけた仲間では「ちつけ、ちんがらがった、じゃすとんぴつ」と叫んでいました。独立形のじゃんけんとして、お座敷遊びをご体験の方は、「野球拳」が懐かしく想い出されることでしょう。賑やかに歌いながら、踊りながら麗しき女性相手にじゃんけんをして、負けると身につけていたものを一枚ずつ剥いでゆく、片方が裸になるまでじゃんけんを続ける、楽しいそして哀れなあそびでした。

冬など両手をポケットに入れたまま足だけで、両足そろえて石、両足前後に開いてはさみ、両足左右に開いて紙という三すくみ足じゃんというのもありました。千里山の駅の地下道、これは私達駅西側の者にとつては通学路なのですが、帰り路に階段の上でじゃんけんをして、ぐうちよきばあ勝った形でグリコは三段、チョコレートは六段、パイナップルも六段と階段を下りてゆく、ほんとに単純なあそびをしながら家路を辿った記憶があります。

少し離れたところにあります、数メートルの間レールと道路が平行に走るところがありました。ここが我々のかくれ場所、待避所で、車の通行も殆んど無く、千里山行きの電車が大学前を出て少し経つと遮断機が降りてチンチンと鳴ります。サツとクギをレールの上に乗せて電車が通り過ぎるのを見守るのです。

たしかにこれは犯罪でしょうが既に六〇年以上も昔のこととして時効としてお見逃がし願いたいことと、幸いにも事故も怪我も皆無でした。そして現代の子供はこんなことをしなくてもあらゆる玩具がきれいに立派に造られたものばかりですし、加工するものあらゆる工具が普及していますから、こんな発想そのものが存在しないのだと思われれます。

さて電車が通ったあとのクギを拾い上げて「やったあー」とか「あーあ、へぼったなあー」とその出来上がりを楽しみにいたしました。つまりクギさし遊びに理想的な形状はクギの先端部がヘラのように、そうですマイナスイオンドライバーのようになれば最高なのです。このような形状になったクギは軽い力で投げても見事に地面に突きささるだけでなく、相手のクギをはねと



べったん

このあそびには女性は加わっていないかと思いません。今の銀行のICカードやSUICAより少し小振りな厚手の紙に関取りや野球選手、映画スター等が印刷されているもので、これを真剣勝負で取り合っこそするものです。

千里山ではべったんと称していましたが、現代標準的な呼称は「めんこ」です。めんこの別称は日本国内で二百五十〜六十種類あるそうで我々の大阪では「べっち」あるいは「べった」というと資料に記されていますが、千里山ではべったんです。

会誌第六号によると千里山の開発が大正九年三月であるといえます。丁度九十年前に北大阪電鉄が大阪住宅経営にご縁ある方で、三重県あるいは奈良の方から千里山へ移り住んで来られた方がいてその子供さんがいろんな遊びを教え、伝えて広めていったものがそのまま残って来たと考えられます。その人が「おーい、べったんやろや」と始まったのでしよう。

ばす面が増えて勝率の高いクギに変化したという訳です。

地面に描いた円の中にクギを打ち込んで相手のクギを倒すか、円の外に弾き出して自分のクギが円内に残って立っていれば相手のクギを戦利品として頂戴出来るというのが最も基本的な遊びでした。

「かこみ」というのは二人で遊ぶときは①・②からスタートして交互にクギを差してゆくのですが、相手の線をまたがなければならぬ地点にクギを立ててしまったらおしまいです。大切なクギを、苦勞して加工して来たクギもぶん取られてしまうわけです。

三人でも四人でも、スタートを3ヶ所、4ヶ所つくれば何人でも遊ぶことが出来ますが人数が多いと大変むずかしくなります。

「蚊取り出し」というのは渦巻きを描いた外側から交互にクギを投げて中心のゴールに先に到達した人が勝者です。線から出たり、相手に妨害されて前へ進めなくなった者はスタートポイントからやり直します。戦利品のクギは箱にためて凱旋したのですが、あのクギはその後どうしたのだったかなあと回想しています。

紙べったんにたどりつくまでの歴史は、ゼノウチ、石遊びからあないち、泥めんこ、鉛めんこ、カネメンを経て紙メンとなるのですが、そのデザイン図柄も時代の趨勢を顕著にしています。軍人さんであったり、力士であったり、第二次大戦後は進駐軍の図柄やポパイ、ミッキーマウスなどのアメリカン・アニメキャラクターや西部劇やターザンなど洋画のキャラが図柄となって来ました。

我々はひっくりかえしん（おこし）が主なゲーム方で、じゃんけんで負けた者が地面、主に玄関のアプローチや犬ばしりが多かったと記憶しますが、先にいいねいに手でゴミや砂を払い除けたあと更に息を吹きかけてきれいになったところへべったんを置くのです。これは隙間をなくしてなるべくひっくり返されないように努力する作業で、また攻める方も地床すれすれに顔を近づけてわずかの隙間を探し、そのポイントを見つけたならば思いっきり自分のべったんを打ちつけて、風圧で裏がえしにすることが出来ればそれをいただけというわけです。みんないろいろな工夫や加工をして参りまして、ロウを塗ったり松ヤニをしみ込ませて



重くしたり、折り目や両妻の細工を施して一枚でも多く稼ごうと頑張ったものです。

その他「出し」といって地床に描いた円形の中へ置いたべったんを横あるいは斜めから自分のべったんを力いっぱい投げ当てて円陣から外へ出せば頂戴出来る代わりに自分のものが円陣内に残ればアウトです。

べったんで憶えたゲームを、雨の日や夜などは室内でトランプを使用して遊んだのはテーブルの片側に少し端っこを出して置き、平手でカードをたたきすべらせて卓上反対のすれすれに止まらせて、一番遠くの者が勝ち、勿論強きたき過ぎて向う側へ落ちれば失格で没収されます。

現代のカーリングに似ていて、相手のカードを目がけて落とし、自分のカードを生き残こすという作戦や技術が必要でした。

わたしは碁や将棋など、頭を使うものは駄目でしたが、こういう単純な遊びで賭博性のあるもの、つまりぶん取り勝負は多少強い方であったと記憶しています。

### 草花あそび

二〇一〇年四月に千里山在住の同期生が企画して呉れた千里山の桜を観て歩く会に参加して参りました。凡そ五十年振りに関大キャンパスからおいなりさん、下と上の噴水などを巡り歩きました。

歩く道順は既に案内を貰っていたので、足腰のあまり丈夫でない者とゆたりゆたりとうしろをついて歩くのですが、驚いたことがいくつかありました。

なんととってもダントツは「どこへ行っても道路は舗装道路」ということです。我々千里山時代に「東京はなあ、道路はぜんぶ舗装されてるんやてえ」と聞いて是非一度東京へ行ってみたい、なかでも陽の当たった坂道とやらの自由が丘、田園調布へ行ってみたくてという夢がありました。それが今では千里山も見事にどこも全て舗装されていたことです。

今から申し述べようとすると雑草だらけの道路や広場もあき地も見当たりません。家のすぐ前でも、はこべ、よもぎ、すぎなどのはびこって嫌な作業のひとつは草むしりでした。

当然ながら住宅地を離れた道路、即ち通学路はもとより、佐井寺への道、一中から上新田、山田村への道、下新田から服部、豊中への道、郊外学園から江坂への道はいろんな草や花が生い茂り、我々のあそびの材料としていろいろな種類のものが豊富にありました。

女性は飾りものとして首飾り（レイ）やかんむり、腕輪、指輪をこしらえたり、笛を作ったり、舟や風車、ぞうり、虫かごを作ったりしていました。

男性は草ずもうと称して、おおぼこずもう、すいすいずもう、すみれれんげずもう等自分が見つけた茎の太い強そうなものを相手のものからませて、引っぱりっこで切れると負け、次の挑戦を受けて勝ち抜き合戦となります。実はこれもコツがあり、作戦がありまして、からませるポイントや引つ張るタイミングと力の入れ具合で、細い茎でも太い茎に勝ち続けることが出来るのです。

たんぼぼが咲く季節には、花が大きくて茎が太いものを探し出して、二人でぶらさげる者、横から花首を叩く者と交互に繰り返すのですが、細い、弱い花はすぐに切り落とされます。これを強くするために、茎

を指でもんだり、舐めたりして、現在の食材のぜんまいのような色、形状にしたものが強くて次々と勝ち抜いてゆくのです。

また古いあそびとして、花びらや葉っぱの数で占いごっこをしました。例えばニセアカシア、正しくはハリエンジュが豊富にありましたのでこの一茎をもぎ取り、各人が自分の葉っぱを決めて目じるしのために一枚の葉先を曲げたり、きずをつけたりしておきます。一番の者が下の葉から「イロハニホヘト」とか「スキキライスキキライ」など、いろいろなじゅもんをとえながら、最後のことばに当たった葉をむしり取り、同じことを繰り返して進めてゆき、最後に残った葉っぱの主が勝者、幸運者というわけです。

我が家の周辺から校外学園方面にかけて多いのは、オシロイバナとツキミソウでした。オシロイバナは花が終ると真中に黒い丸いタネとなります。これをつぶすと白い粉が出て来ます。これでお化粧ごっこのスタート。「これはなあ、パピリオの原料なんやでえ」と、たったひとつ知っていた化粧品の名前を出鱈目に

ほざいたり、これも実際にはみたこともないのに「歌舞伎役者の顔にしてやる」と、いやがる近隣のガキ共の顔へ塗りつけていました。

ツキミソウは夕方になると一斉に明かるい黄色の花を開いて、さきほどまでとは全く異なった景色の世界に変えてみせてくれます。

カヤツリグサ 茎が三角柱のようになっていて、切り口に裂け目を入れて向い合わせになって静かにねじり開くと、きれいなマス形が出来れば仲良し仲間なんだとはしゃいでいました。

イノコズチ かぎ型に曲ったトゲがありまして、衣



服にたくさんくっついてきますし、犬や猫も身体中にこれがくっついて運ばれていった所でまた繁殖するという草です。これを仲間の胸や背中にくっつけて文字や絵模様を描いたりしました。オオオナモミ わたし達はヒツツキムシと言っていました。指ではさむと痛い、鋭いトゲトゲの大豆くらの豆粒状の実です。これを投げ合っこするためにはたくさん集めなければなりません。これを探るために少し深い草むらへはいり込んで、自分の腕や膝から下はすりきずだらけとなりました。

スイバ タデ科の植物で、茎や葉脈が赤味がかっています。この茎のやわらかい新芽の頃に皮をむいてかじるとまことにすっぱいのです。ふるえました。

北原白秋の、土手のすかんぼ、ジャワ更紗・。このすかんぼはスイバのことだそうです。

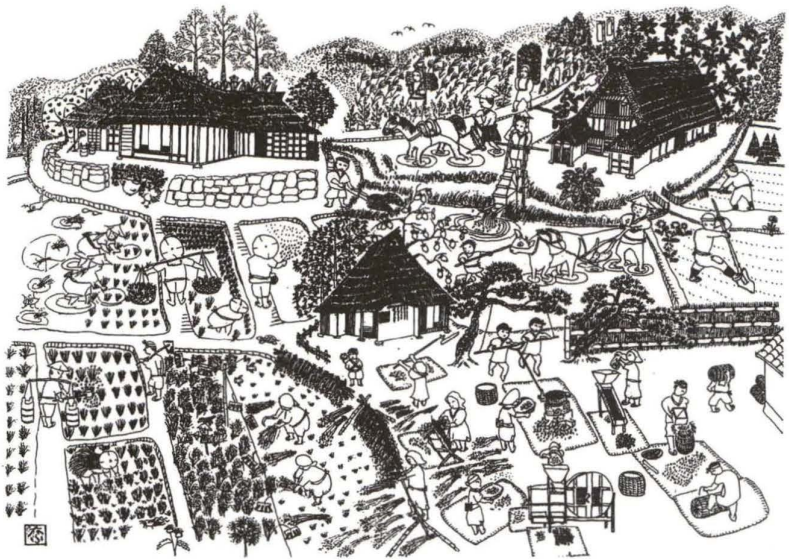
ヒイラギ 吹田一中の下のグラウンドのその先に幽玄な雑木林がありまして、水が流れてはいても川ともいえない溝がありました。この周辺に野生の柊が数本ありましたが、大抵は住宅街の玄関先やアプローチに整



枝された植木なのですが、この葉っぱの縁は大きな鋸葉となつています。この葉っぱ一枚を親指と人差指で軽くはさんで息を吹きかけると風車のようにくるくる回るので。

飽きることなくこんな単純なことを繰り返していたが故に、今にあいつは酔生夢死な奴だったと言われるかも知りません。

女性達は必ずレンゲ草やクローバー(シロツメグサ)の花を編んだり、結んだりの遊びに興じていたということは、それほど草花が無尽蔵に生えていたという長閑な、子供達にとっては天国のような街でした。いや今も長閑で、平和な街でしょうが、自然の草花、野生の植物が見られない街になつたなあと感無量です。



またあしたな

「遊び」についての資料を繙くと必ず冒頭に出て来るのが梁塵秘抄の一節です。

遊びをせんとや生まれけむ  
戯れせんとや生まれけむ

遊ぶ子供の声聞けば  
我が身さえこそ動かるれ

つまり人間の基本的目的的行為が、遊び、作業、労働に大別されていまして、楽しむため、生活するため、生きるためとしての行動が明確に区別される所以と言われます。そして「遊び」の対照行為、言葉として「勤勉」が当てられるとありますが、子供にとっての遊びはそれが生活であり、仕事であり、協調や規則の修得なのです。そしてこの遊びも生い立ちや生活環境によって個人的な差異が生じて参りますが、基本的な遊びがあつての生活、遊びがあつての労働という解釈は子供のみならず人類全てに共通の行動現象と定義づけられています。

そこで巻頭図の仁が別の機会に描いて呉れた「三十三人のはたらく人々と赤ん坊ひとり」の図は、こうした人達の営みのお陰でわたし達が育つて来たのだという観点からいしえの民家の構造や構築資材、そして生活様態や風習、使用している工具や牛馬の力を借りての作業、自然の虫や生物、草花との共生等々は、今まで書いて参りました「千里山時代のあそび」の具象的な背景であり、回想回顧を具現化させる支え柱であると考えます。

現実にこの遺産が服部緑地に残され、ボランティアの方々ご理解協力によって保存され訪ずれる人達に解説されている様です。このボランティアの一員として、今回挿絵を描いて呉れた仁が参加しておられることを書き加えさせていただきます。

「千里山時代のあそび」の絵に登場する子供達は、何人いるのか時間の許される方は数えてみて下さい。